

バイブルスタディーについて

2007年1月「摂理」脱会者 YANTA

BSの全体像と目的、核講義のポイント教祖のメシヤ性について記しています。BSに対する私の基本的な理解と考え方です。

=====

まず、バイブルスタディー：30講論(以後BSと記しますね)の目的は、
「あなたにとって、現世に居る再臨のキリストとその教えは絶対不可欠なものである。その再臨のキリストとは、鄭明析氏である。」ということが全てです。
そのための30講に分け、順序だてています。それは前段階の講義を受認すれば、必然的に次の段階の講義の受認する仕組みになっています。そのため、あらかじめ先の講義に関しての情報を与えません。

また、BSで伝えられていることは、大別して
正統キリスト教の教えからもってきた内容。その大方は、神の栄光、感謝や自制、愛を持った生活、祈りの力といったもので、どの宗教でも共通項といえる魅力的なものです。
それと、「摂理」独自の内容。大部分は統一協会の「原理講論」の弱点を強化しながら焼きなおしたもので、姦淫による墮落論、イエス・キリストが十字架にかかったことによる救いの失敗、そのために再臨主の登場の必然性、再臨主による救いの絶対必要性、その再臨主が教祖であることの裏づけなどです。
その二つが見分けがつきにくいように各講義の中で混在させた状態で享受されます。
そのため、「摂理」のメンバーは、信仰者として愛深く接する一面と、組織の構成員として「摂理」を絶対化しそこへ多くの若者を導こうとする一面、とを併せ持つことになります。

BS(30講論)各講義の核心・ポイントについての考察

- 1、「ペテロと魚」：聖書は比喻で書かれている。
- 2、「日よ、とどまれ(Sun Stop)」：聖書は時代性を考えて読まなければならない。
- 3、「エリヤとからすのパン」：聖書は神様の立場・心情で読まなければならない。
- 4、「七段階の法則」：真理の重要性を認識する。
- 5、「人間の構造」：霊・魂・肉の性質と関係について知る。本来あるべき人間の状態。
- 6、「比喻について」：比喻とはどういうものか。時代とのかかわりを知る。
- 7、「火の概念」：御言葉の価値を知る。自分に対してどういう働きをするのか。
- 8、「終末について」：今、終末の時、起こることすべきことを歴史の同時性を通して学ぶ。
- 9、「無知の中の相克世界」：神どのように働かれるか。人(敵をとしても)を通して働き、必ずなされる。
- 10、「異端に概念」：異端とは神とキリストを否定、キリストが肉体をとってくることを否定すること。神から見た正統を見分ける。
- 11、「洪水の裁き」：神が導く理由 婚姻の乱れ 善悪分立 エデンの回復。罪刑法定主義の神。今の時代、御言葉による霊的な裁き。
- 12、「予定について」：全人類を救う神の絶対的予定、その中の人間の相対予定。
- 13、「中心人物について」：神は中心者をとおして強く働く。中心者の素質と路程を学び、自分の神・キリストと歩む路程を考える。

- 14、「復活について」:死から命へと霊の復活。神との関係性の回復。キリストの御言葉を聞くこと。行いの復活へ、日々さらにまさった成長へ。
- 15、「サタンについて」:復活を邪魔する者。サタンの存在・性質・対策について知る。サタンに打ち勝った者がキリスト。
- 16、「カインの性格について」:神が救いに導かれる法則、善悪分立。神から見て、より悪とされる性格。
- 17、「霊界について」:霊界での救いの次元、環境、状態は、神・イエスキリスト・再臨主の何を信じ、信じないかによる。霊界と地上はオリジナルとコピーの関係。地上で行ったとおりに報われる。
- 18、「啓示について」:神がどのように、人間にメッセージ・真理を伝えられるか。いつも啓示を示されている自分たちが受け取るかどうか。聖書・御言葉が最も直接的で重要。
- 19、「メシヤの資格」:
- 20、「千年王国」:これからキリストとともに成っていく世界。一人ひとりが自分の個性分野で輝き、キリストを中心とし、お互い理解し、神・キリストと一体となる世界。天国は心の中にある。地上でなされた分、霊界でもなされる。
- 21、「イエスとエリヤの再臨実相比較」:再臨主がどのように来るのか、をエリヤの再臨をとおして知る。イエスは霊として心情・使命が同じ人に再臨する。
- 22、「イエスとバプテスマのヨハネの関係・使命比較」:再臨主をどのように迎えばいいのかを、イエスの時、バプテスマのヨハネの失敗から学ぶ。キリストを見つけ、キリストに従って(キリストを中心に生きる)、証する(御言葉をもって生き、伝える)ことが使命。
- 23、「教理の比較」:キリスト教4大教理(空中引き上げ、終末、火の裁き、復活、天国、千年王国)の真実を正す。
- 24、「二本のオリーブの木」:神の歴史のなされ方。前・外・肉的和と後・内・霊的な二人の使命者を立てる。イエスと再臨主。後者は前者の証をしながら歴史を完成させる。
- 25、「ひと時とふた時と半時」:蕩滅からの第1・2イスラエル霊・肉的開放による新しい歴史の始まりを知る。
- 26、「創造目的」:神が人間を作られた理由を知る。愛の対象からくる喜び。そのために栄光を帰す = 御心どおりに生きること。御心とは、生めよ・増えよ、地に満ちよ。
- 27、「墮落について」:アダムとエバの異性の罪。愛での失敗。墮落とは自分の位置から離れたこと。神の愛から離れたこと。
- 28、「救いについて」:墮落から創造目的へ回復すること。キリストを信じ従うこと。新約時代、民の不信によりイエスは完全な救いをなせなかった。再臨主に会い信じ仕えることで完全な救いを得る。
- 29、「再臨について」:
- 30、「歴史について」:

これは、私がまだ「摂理」に信者として所属していた頃に、自分の講義ノートをもとに個人的にBSのポイントをまとめようとしたものです。19、「メシヤの資格」に関してはノートが手元になく抜けていて、29・30は聞く機会のなかったものです(30講全てを聞かなくても信者になりえます)。この2つは伝えられる講師が数少なく、幹部クラスの人が全体集会や合宿などの機会に伝えることが多いです。30、「歴史について」は、アダムとエバから、イエスを通り、教祖に至るまでの歴史を「摂理」の解釈で伝えるもので、7時間にもおよぶものだと聞きます。基本的に数字の順番どおりに進められますが、興味関心や理解度や教会側の状況などによって、多少前後することもありますし、時間的な問題によって飛ばす講義もあります(4.24とか)。

BSは、大きく分けて、
入門、1～5
初級、6～12
中級、13～19
上級(応用)、20～24
核心、25～30
となっています。
順に説明すると、

入門では、

- ・新入生に聖書の学びに興味を抱かせる。
- ・キリスト教の聖書解釈を批判し、「摂理」の教義がより高い合理性を持ち合わせていることを示す。
- ・比喩を強調することによって、聖書を自由解釈(都合のよいように)できるようにする。

ことが目的です。

・5「人間の構造(三分説)」では、霊の存在を説き、その成長が人間にとって不可欠であること、それは神からの御言葉を聞き実践することで達成されること、
が教えられます。これらは今後、展開される「摂理」独自の聖書解釈と教義を納得のいくものにするための準備であり、土台です。

初級では、

「摂理」の世界観を中心的に教えられます。

8. 今が新しい救いの時代であること、9. 11. 12. 神による裁きや導きの方法、7. 御言葉の絶対必要性、
についてです。これらはBSを聞き進める必要性をうたえるものです。

中級では

再臨のキリストの存在とその絶対的な必要性を説きます。13. 17. 19. です。

14. では霊的成長の必要性を、15. ではサタンの存在を説き、さらにキリストによる救いの必要性を後押しします。

このあたりで、再臨のキリストに出会って救われなければならない、という思いをもたせることに努めます。

16. は、あなたが選ばれたことの原因を示すものでもあり、信者になった後どういう人を導くべきかをも示しています。

上級(応用)では、

再臨のキリストがどのように現れるのか、どのように働くのかについて、20. 21. 22を通して強く学びます。

つまり再臨のキリストがどういった存在なのかを教える部分で、自分がどのようにして再臨のキリストと出会い、
付き従うべきかを考えさせる部分です。

核心では、

26. 27. 28でどのようにして「摂理」で生きていくべきかを教えます。

25. 「ひとときとふた時と半時」が、もしかすると一番最後に聞くことになるかもしれません。この話が、教祖鄭明析氏が、自らが再臨のキリストであるということを悟ったエピソードと聖書的裏づけについて示しています。
こういった一連の流れによって「摂理」で生きて、教祖を信仰することが絶対必要だと確信させるのです。

教祖が再臨のキリストであると決定付ける教義は、私が思う限りは2つです。

ひとつはその、「ひとときとふた時と半時」の解き明かし。

もうひとつは、6. 比喩についての中にある「特別比喩」の“鷲”に関して。

一つ目の「ひと時とふた時と半時」とは、

[ダニエル書12章5節]からの「ひと時とふた時と半時」を3年半とし1ヶ月30日計算で1260日と換算する。さらにこれを年に置き換え1260年を、[ダニエル書12章11節]の「常供のはん祭が取り除かれ、荒らす憎むべきものが立てられるときから」をひいて、これをユダヤ大辞典によるイスラエルにモスクが建てられた年(常供のはん祭とはユダヤ教会をさし、荒らす憎むべきものとはイスラム教寺院のモスクを指す。)の西暦688年に1260年を足すと1948年になる。この1948年はイスラエルが建国された年で、これを「肉的イスラエル開放」として、計算の正当性とする。そして、[同11節]の1290を688年に足した1978年に「成約時代」が始まり、再臨のキリストが布教を始めるとする(「霊的イスラエル開放」と呼ぶ)。[同12節]の1335を688年に足した2023年に再臨のキリストはその使命を終えたと解釈する。

これをある日悟ることとなった鄭明析氏は、神からの啓示として自分が再臨のキリストの使命を受けたと悟り、1978年6月1日にソウルで伝道を始めたとされる。

このことが教祖「先生」が再臨のキリストとされる所以のひとつです。

二つ目の「特別比喩」の鷲については、[イザヤ書46章11節]の「私は東から猛禽を招き、…」という神の啓示の箇所を用いて、「東」とは極東アジアの熱心なキリスト教国である韓国を指し示し、「猛禽」とは「鷲」のことで、「鳥類の王」である鷲は「メシヤ」を喩えていると教えます。つまりこの聖句は韓国から再臨主が現れることを予言していると解釈するのです。

バイブルスタディーの意味、各講義のポイント、教祖が再臨のキリストになる理由を、「摂理」側の主張をもとにした私の見解を書きました。

=====

というところです。「教祖のメシヤ性への指摘」については、別文章に特筆して書いていますので、そちらをご参考ください。